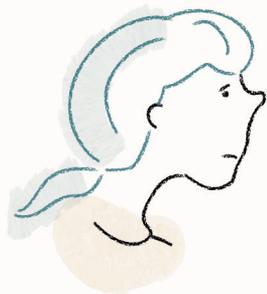
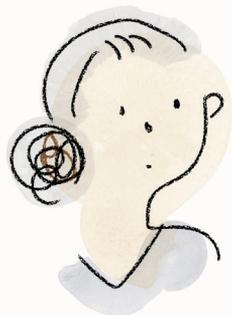


聴きあおう
未来を照らす
あなたの言葉
わたしの言葉



もくじ

4	プロジェクトの紹介 国連メジャーグループへの注目－背景 北海道メジャーグループプロジェクトの始動
9	各グループの報告 女性グループ ユースグループ 農民グループ 障害者グループ 地域コミュニティ（余市）グループ NGO・NPO グループ 研究者グループ 企業グループ
42	全体ミーティングの報告 報告 各グループ発表のグラフィックレコーディング
50	ふりかえり座談会

国連メジャーグループへの注目

プロジェクトの背景

小泉雅弘

NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

国連メジャーグループとは

国連のメジャーグループとは、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（通称：地球サミット）を契機に創設された仕組みで、女性、子どもと若者、先住民族、NGO、地方自治体、労働者と労働組合、ビジネスと産業、科学・技術コミュニティ、農民という9つのグループを指します。地球サミットの成果文書である「アジェンダ21」の第三章では、各グループが持続可能な開発に果たす役割が述べられており、SDGs（持続可能な開発目標）の策定プロセスにおいては9つのメジャーグループに加え、地域コミュニティ、ボランティアと財団、移民と家族、高齢者や障害者といったグループも議論に参加しています。

地域版メジャーグループの呼びかけ

2018年、SDGs未来都市に採択された北海道は、SDGs推進ビジョンの策定にあたり、意見交換の場としてSDGs推進懇談会を開催し、私も参加する機会を得ました。道のビジョンは当初の骨子案の段階から「道内の多様なステークホルダーが共有する基本指針」として位置づけられていましたが、ビジョンの策定にあたって多様なステークホルダーの参画は想定されていませんでした。そこで私は、国連のメジャーグループに倣ったグループ毎のミーティングを行うことを懇談会メンバーに呼びかけました。道のビジョンは短期間での策定が想定されており限られた期間でしたが、この呼びかけに懇談会メンバー有志が呼応し、女性、若者、アイヌ民族、CSO（市民社会組織）、企業（経済）という5つのグループミーティングがそれぞれのイニシアティブによって開催され、その成果を懇談会で提案することができました。残念ながら、道のビジョンに

これらの提案内容はほとんど採用されませんでした。このプロセスに関わったメンバーからは、グループミーティング開催を評価する声があり、さっぽろ自由学校「遊」と北海道地方ESD活動支援センター（EPO北海道）のイニシアティブで、2019年度より改めて地域版のメジャーグループ形成に向けた取組みを開始しました。

2019年9月には、両者の共催でESD担い手ミーティング「SDGsの本質ってなんだっけ？ SDGsそもそも論」を開催します。ここでは、SDGsの根本にあるサステナビリティについて改めて学ぶとともに、国連メジャーグループの考え方や役割について学びました。また、障害者インターナショナル（DPI）北海道ブロック会議の西村正樹さんからDPIにおけるSDGsへの取組みについてお話しいただきました。この出会いは、後の障害者グループの形成につながっています。

2020年2月には、ESD担い手ミーティング第二弾として「北海道版メジャーグループを考えよ

う！」というミーティングを持ちました。この場に集まった人たちの中で積極的に手を挙げてくれた人が、2020年度に正式に立ち上げた「北海道メジャーグループ・プロジェクト」のコアメンバーになりました。

地域版メジャーグループのもつ意義

「持続可能な開発」をめぐるは、日本においてもマルチステークホルダー・プロセスにしばしば言及されます。しかし、そこで想定されているステークホルダーとは往々にして行政や企業（経済団体）、学識経験者、一部のNPOなどにとどまっています。国連のように、女性や若者、先住民族や農民、障害者といった人々が主要なステークホルダーとして想定されているケースを私はあまり知りません。また、メジャーグループのようにそれぞれの主体がグループとして検討し、その意見を提案する仕組みは国内にはほとんど見当たりません。

SDGsを打ち出した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」には、以下のように書かれています。「これは、人々の、人々による、人々のためのアジェンダであり、そのことこそが、このアジェンダを成功に導くと信じる」。ここで言う人々（people）とは、多様な属性をもつ人々であり、そして往々にして弱い立場に置かれがちな人々でもあります。このアジェンダが提起している「誰ひとり取り残さない」社会を具体化するためには、これらの人々が単に手を差しのべられる対象とされるのではなく、意思決定の権利主体となることが求められます。私たちの取組みが、その一つの足がかりになればと思っています。



北海道メジャープロジェクトの始動

小路 楓

北海道地方ESD活動支援センター

2020年度、最初にこのプロジェクトの打ち合わせをしたのは2020年5月26日でした。2019年度に別の形で行われたメジャーグループに関する企画に参加した人が引き続きメンバーとして参画することになっており、少なくともその時の打ち合わせではグループ数にして4グループ（ユース、企業、地域コミュニティ×2）が決定しました。その翌月の打ち合わせでは女性グループと障害者グループの追加が決定し、その後農民グループ、NPO/NGOグループ、研究者グループが決まり、最終的に合計9グループでのプロジェクトが実現しました。

グループミーティングでは、「国連創設75周年（UN75）一緒につくろう わたしたちの未来」において、

「未来に関する対話」として投げかけている3つの大きな問いを参考に「私たちはどのような未来をつくりたいのか」「それを実現できる目途は立っているか」「そのギャップを埋めるためには、どのような行動が必要か」の3つをプロジェクト共通の問いとしてグループごとに対話を行い、その結論や過程は12月に開催した全体ミーティングで発表しました。主催チームの主幹団体を務めたさっぽろ自由学校「遊」や、北海道地方ESD活動支援センターをはじめいくつかのグループミーティング担当団体はRCE北海道道央圏（国連大学認定の、持続可能な開発のための教育に関する専門性のある地域拠点）でつながっています。加盟してい

る団体を多く巻き込んで進めてきたということもあり、このプロジェクトには興味のある人が知り合いに集まるべくして集まったといえるでしょう。北海道地方ESD活動支援センターも、持続可能な社会の作り手をはぐくむ取り組みの支援・推進を行う組織として、最大限この取り組みのサポートをしている次第です。

プロジェクトは北海道においても持続可能な社会づくりにおいて「誰一人取り残さない」ことを目指したものです。参考にしているのは、「国連メジャーグループ」で、これはNPOや女性、ユース、農業従事者など、特に政策の決定において取り残されてしまう9つの社会的属性をメジャーグループとし、取り残さないようにしようというものです。北海道でも、多様な社会的属性の人が活発に動いていますが、誰一人取り残さないためにも、まずは今一度持続可能性のために「行政に対して声を上げる」だけでなく、自分たちのことについて対話を始めること、その先にズレや本末転倒のないアク

ションを実現することに意義があると感じています。

昨今、新型コロナウイルスの感染拡大や自然災害をはじめ、イレギュラーなことが毎年起きていて、個人的にはもうここまで来たら「例年」なんて言葉はあってないようなものじゃないかと思います。こうも環境的変化が大きいと、目の前のことをやるだけで精一杯になってしまいますが、未来のことを考えたって必ずしも今すぐに目に見える利益になるわけではありません。それでも、あえて時間をとって10年後や20年後の未来について対話することで生み出せる、迎えられる未来があると感じています。

各グループの報告

女性グループ

札幌市男女共同参画センターは主幹団体である北海道ESDセンターの小路さんにお声がけいただき、女性グループとしてプロジェクトに参加しました。

グループミーティングを開催するにあたり最初に考えたことは「誰とどうやって話そうか」ということです。当センターは札幌駅の向かいにあり、「ジェンダー平等な社会の実現」のために取り組んでいます。普段関わる団体や事業への参加者は少なからずジェンダーに関心がある人や知識を得ようとしている人たちです。しかし今回のプロジェクトのメンバーは必ずしもジェンダーへの関心が高いわけではない方々です。そうした人と一緒にジェンダーについて考え、話し合うためのプログラムを組み立てました。

そもそも「ジェンダー平等な社会」とはどんな社会でしょうか。定義は人それぞれですが、私は「す

久世ののか

札幌市男女共同参画センター

すべての人が性別や属性によらず、個人としてその人らしく生きられる社会」ととらえています。だから「女性」グループであっても性別でくくらず様々な立ち位置の人と話したい。一方で、日本では女性が、何かを我慢したり、いざという時に他よりダメージを受けたりしてしまうのも事実です。そこで女性だけの回とすべての人を対象にした回の2回に分けてグループミーティングを行いました。

1回目は女性だけで今の課題感や10年後のビジョンについて考えました。参加者の年代がバラバラで、20代にとっての10年後20年後を今過ごしている方がいるなど、それぞれの立ち位置での課題や希望がでてきました。次の回では、それらをSDGsのゴールとつなげ、必要なアクションやプロジェクトの3つの問いについて考えました。

女性グループからの3つの問い、特に3番目の問いへの回答は「自

分から行動すること」「周りを巻き込むこと」そして、「楽しんでやること」です。

この答えを持って参加した全体ミーティングでの大きな成果はジェンダー以外の立ち位置からSDGsの達成にとり組んでいる人の見方を知ることができたことです。特にユースグループの発表にあった「モヤモヤ感」とその分析は女性が日常の中で感じるジェンダーへの「モヤモヤ」にも通じる

ものがあると思います。

そんな少し近い距離にいるユースグループと女性グループに対し、企業グループから質問が来しました。「北海道ではキャリアのある女性が活躍できる場が少ないと言われてます。では、女性やユース（の立場）から考えて、『起業を選ぶ』か『企業が変わるべきと思う』か。それはどうしてか。考えを聞かせてください。」というものです。私たちの回答は「起業だけでなく多



第1回ミーティングのワークシート

様な働き方ができるような選択肢があるべき。そのためには企業も変わる必要がある。持続可能性を徹底的に追求してほしい。持続可能性を実現したいならば、女性やユースが活躍できる場所の整備は避けられない。」です。どちらか二択ではなく、その人が自分に一番合った働き方、生き方を選び実現できる、個人が安心して長く働ける社会来てほしいとの思いを込めました。

「ジェンダーベースで物事を考え

る」というのが、センターの合言葉の1つです。全ての社会課題の根底にジェンダーはあるという考えです。それはすなわち、ある社会課題が表になった時にそこには必ずジェンダーとつながる課題があるということであり、またジェンダーとは別の第3の課題がつながっている可能性も大いに含んでいます。

1つの視点ではわからないことが別の視点から気づけることもある。1人ではうまくいかないこと

エンゲージメント

① 私たちはどのような未来をつくりたいのか

性別や生まれ、ライフイベントに関係なく、すべてに人に機会と選択肢が平等に与えられ自分らしい人生を自由に選べる社会。

自分を小さくすることも、大きく見せることもせず、全力を発揮できて、ありのままに互いに支え高めていける社会。

第一回ミーティングの内容

キーワード

2030

多様性 認め合う 話し合う

2020

排他的 話しにくい 知らない イメージ

アクション

ロールモデル 発信する 伝え合う 身近なところから

も何人かで一緒に取り組むことで前に進む。まさにそのことを今回のプロジェクトで実感しました。

「なんかこれおかしくない？」「こっちの方が素敵だね」と、声をあげると仲間が見つかります。変えるべき課題だと気づいてもらえます。10年後、理想の未来を描いてもそこに至る過程が長く困難であると、あきらめたくなることもあります。けれど、私たちは1人ではありません。今回つながっ

た仲間たちが動くことで「誰一人のこさない」で理想の北海道を実現できることを信じています。そのためにこれからもこのつながりを大切に、一緒にアクションをし続けていきたいです。



ユースグループ

文・進行：長谷川友子

任意団体 snug
(当時：任意団体「話をしよう」)

2020年の春、コロナ禍に入ったことをきっかけに、任意団体を立ち上げ、オンラインでの対話の場づくりを行っていたところ、北海道地方ESD活動支援センターからユースグループミーティングへのお声がけをいただきました。当初は、私はユースという属性ごとに集まるということに必ずしも意義を感じていませんでしたが、プロジェクト自体に関心を持ち、本企画に参加することとしました。

募集するユースについては、SDGsや未来のための先進的な取組をしているかどうかではなく、「現状に満足できない」という共通の思いを持った人が集まる場になるよう呼びかけ文を作成し、参加者を募りました。

呼びかけにあたり、事前に15人程度のユースに話を聞いたところ、「自分の考えを安心して話すことのできる場所がないことから、未来

を想像することが難しい」という課題が浮かび上がりました。このユースの課題に対して「必ずしもユースだけの問題ではないのかもしれない」「他世代に耳を傾けてもらえるだろうか」という不安もありましたが、本企画の他グループのコアメンバーに共有してみたところ、「ユースの現状に衝撃を受けた」「真剣に話す場が少ないことは社会全体の問題だ」「未来のことを話しても無駄という思いがある人も多いのではないか」といった意見、疑問をもらえたことにより、受け止めてもらえたという安心感をもって全体ミーティングに臨むことができました。

この「自分の考えを安心して話すことのできる場所がないことから、未来を想像することが難しい」というユースの課題を踏まえ、各回10人程度の参加者が集まった全5回のミーティングを通して、と

もに自分たちがつくりたい未来について対話できる関係性の構築を目的として、各回のプログラムを設計しました。

そして開催された第1回目から第3回目のミーティングでは、現状把握として「自分自身がどのようなことを考え、どんな言葉から影響を受けてきたのか」、などといったこれまで意識していなかったことをテーマに対話を行ったところ、「自信がない」「未来に対する理想を描けない」という現状があることが明らかになりました。

それを受けて第4回では、自らの自信がないゆえにできなかったことを話し合い、最終回の第5回では、参加者がこれからどんなアクションをしたいかというテーマで話しました。

具体的な案は出なかったものの、『自分たちのこうしたい』が社会によって捨てられることのない未来を迎えたいということ言語化し、1歩を踏み出し始めることができました。また、そのために安心して素直に話すことのできる対話を続けていきたいという声が

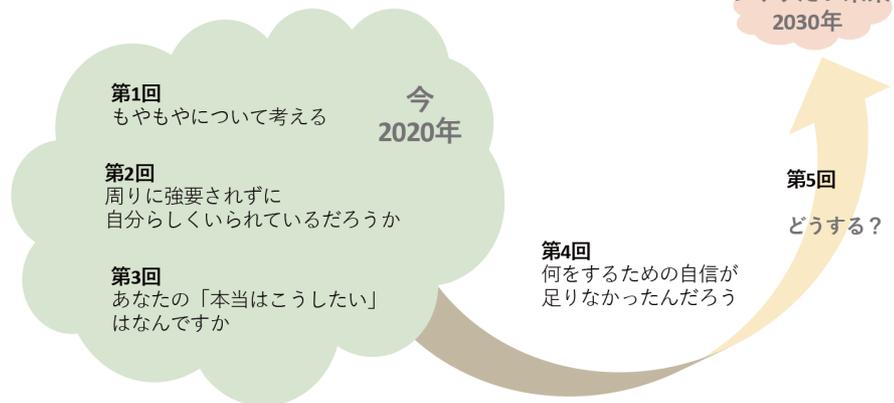
参加者から多数出たことにより、ユースグループミーティングが終了したあとも、困ったことを投げかけ合える関係性を構築することができました。

ユースグループミーティングだけでなく、ユースグループミーティングの開催後に行われた、各グループの参加者が集まる全体ミーティングでの参加者のリアクションから、ユースの現状が多くの人に知られていないことに気づきました。具体的な解決策はこれから考えていきたいと思っていますが、先に述べたような「自信がない」といったユースの状況から、現状でいっぱいユースだけで未来を考えることは難しいと感じました。

今後はユース同士で安全に話していく場だけでなく多世代の参画の場も大事にしながら、持続可能な未来を創っていくために取り組んでいきたいです。

(ユースグループミーティングは、北海道地方ESD活動支援センター主催でおこなわれました。)

各回テーマ（以下参照）を用意し、
問いに向かって話しました



第1回 周囲に言われてもやもやしたことはなんですか？

例)

「若いのに偉いね」 「そこで働けていいね」
「留学にいけないね」 「忙しいから」
「さっきも言ったよね」 「今が踏ん張りどきだから」
「卒業が決まっても内定が決まらないと意味がないよ」

「あなたとは違う側にいるから」と線を引かれること？

- ・もやもやとは 距離をあけられたと感ずること？
自分が一番よくわかっていることを言われること？

こうしたもやもやがあるから自分らしくいられないということがわかった

第2回 自分らしくいられないときはいつですか？

例)

「あなたはプロだね？」... プロとして振る舞わなくてはいけない、
ついていけない
「あなた（の会社）はすごいね」... 見合う自分でいなくてはいけない、
私がいなくなる、押しつぶされる感じ

- ・「自分らしくいられない」状況とは、

周りの人についていけないと感じるとき
周りの人に追いつかなければいけないと感じるとき
周囲に求められる振る舞いをしなくてはならないとき

第3回 あなたが自身に対して見てみぬふりを してきたものはなんですか？

例) Aさん 自分の身体の不調（摂食障害など）について見て見ぬ振りをしてきた

Bさん 自分自身を見つめることを避けてきた。
自分と他の人との距離感をはかって行動してきて、自分の
やりたいことと向き合うことを避けてきた。

Cさん 自分の「こうしたい」を無視してきた。
本当の気持ちや身体のことをあまり考えなくなった。
「自信がない」という声が共通して聞かれた。

第4回 何をするための自信が足りなかったんだろう

周囲に比べ経験が少ないことから、自分の考えや意見に自身が持てなかった。

「こう思います」と断言できる自信がなかった。

自分に自信を持つ（自分らしくふるまえる）にはどうすればいいのか
ということ話を始めて話を終えた。

第5回 今後、どのようなことをしていきたいですか

- 例) ・自分の気持ちに素直になる
・弱さを隠すのをやめる、怖がりながらいることを隠さないでいる
・いい子であるように振る舞うのをやめる
・一人で頑張るしかない仕組みから抜けるために、対話をする
・「～だからこうすべき」など、可能性の範囲を狭めることを
普段から言わない
ユース同士の対話を続けていきたいという声があり、困ったことを話し
合えるつながりができた



私の「本当はこうしたい」が社会によって捨てられることのない未来をつくりたい

農民グループ

荒谷明子
メノビレッジ長沼

なぜ、今回私が農民グループの取りまとめ役をお引き受けしようと思ったかをお話します。

今の社会が抱える問題を見聞きするたび、地球環境が不健康な方向へ進んでいることを感じ、このままでは「生きていく」ということもままならないんじゃないかと思ってきました。誰しもが「幸せだ」と感じられる生き方を求めているけれど、それがどんなものでどの方向へ進めば良いかを話すことができる場所や時間はどう作っていったらいいんだろう？暮らしや社会を変えていくために、立場の違う人同士が協力し合うには、どこから始めたらいいのだろうか？日頃から、そういうことを考えていました。国連の目指すSDGsの考えを聞いても、なんだか絵に書いた餅のような印象が拭えず、正直にいうと企業が広告に使っているのでは？と感じて

しまうこともありました。

そんな時に、小泉さんからこの企画へのお誘いをいただきました。

政府を批判するだけで世の中の状況を悲観するのではなく、自分たちにできることをまずやってみたい、市民の立場からSDGsの掲げる目標である「どんな立場の人も取り残さない」を実践するため、小さな一人ひとりの声を聴き合うことを諦めずにやってみよう、と思いました。そして、そういう機会に農民で話し合っただんな声飛び出すのだろうか？と興味もありました。そして、話し合っただりではなく、あとで他の立場の人に聴いてもらうことも貴重な機会となるだろうと感じました。

私たちは共通の三つの問いをより具体的に話し合えるよう、以下のようなカッコ内の言葉に置き換えて話し合いました。

1. どんな未来をつくりたいのか？
(大切に思っていること、目指していること)

2. 実現するメドは立っているか？
(できてること、足りてないこと)

3. 実現するためにどんな行動ができるか？
(やりたいこと、やれること)

たくさん意見が出されましたが、まとめたものを図で紹介します。

互いの意見に耳を傾け合うことは、言葉にならないそれぞれが抱えていた想いが少しずつ紡がれて

いくような体験でした。皆が日々農作業を通して、いのちの循環に触れたり、多様性の持つ力を感じたりしているからこそ、世の中が人間の都合を優先して進んでいることへの危機感を切実に感じることがわかりました。特に、種子の権利など食料主権が企業に移っていていることも身近な問題として出されました。そういう中で農家の役割はなんだろうと考えると、食を通して社会とつながっていること、そして先人たちの技術や知恵、想いを継承する立場であ

どんな未来をつくりたいのか？ (大切に思っていること、目指していること)

- 小さい家族経営で、暮らしが日々の豊かさをつくるような未来
- 微生物が土をつくり腐植ができ、結果として作物がよく育つ農業
- 都会の人に土と触れ合う機会と、自分を取り戻す場を提供する
- 先人たちの知恵や技術を継承する存在となる
- もっと暮らしを楽しみ、その姿を見せ、後継者が安心して引き継げる環境づくり
- 食が満たされて、安心して平和な世の中
- 農村コミュニティが種子を採取する権利や食の主権を持てる社会

るということも話題になりました。

自分は何かができるのか、どうしたいのかという問いも農作業をしながら見つけていけるという発言も共感しあって聴きました。そして、「食べ物を育てる」ことに徹すれば誰とも競争しなくていいし、誰とでもつながれる職業であることに気づきました。企業グループの清水さんが、「企業が変わることにより、SDGsの全ての問題が解決するのでは?と思っただ」とおっしゃっていましたが、農民グループでも「農業がSDGs

の全ての問題を解決できる力を秘めているのでは?」と近い思いを持ちました。

当初参加した時は、全体ミーティングまで進んだ先に何か新しいプロジェクトが始まることを見越しての計画かと思っていました。そうではなくて、対話のモデルを北海道から発信することが目的と知り、自分がどう感じるのか、どんな展開になるのか、まずはやってみようという気持ちで関わりました。

農民グループでミーティングをして感じたことは、「安心して素直

実現するメドは立っているか? (出来てること、足りてないこと)

- 自分にも他人にも誠実に、おごらず日々目に見えないコトと向き合う暮らし
- 地域で栄養やお金が循環することを目指して、まず地域のものを食べることから始める
- 家族で協力して仕事ができている
- 違う立場のいろいろな人と対話し、つながる場が足りない
- 自分の暮らしからなかなか外へ広がっていかない
- 今後の目指す姿やビジョンが見えない(何をどう育てるか)

実現するためにどんな行動ができるか? やりたいこと、やれること

- 人・土・空気・水を大切にす農業を目指す(それは、自分を大切にすることでもある)
- 炭素を土壌に蓄える農法へ転換したい。大気中のCO2濃度の減少にも貢献できる
- 農場ではいのちのつながりを、社会では農家同士や食べる人とのつながりを愛しむ
- 廃プラスチックを減らしたい。そのためにも規模を見直したい
- 外部から購入する資材を減らし、自給して、暮らしを自分たちの手に取り戻したい
- 不耕起栽培の家庭菜園を紹介して自分で野菜をつくる人を増やしたい
- 種子の銀行やネットワークをつくりたい

に話せる場」がとても大切だということでした。今回気負わずに話し合いができたのも、当事者同士の対話の場だったから、ということが大きかったです。農民だけで集まってこのような話しをするという機会が実は今までなかったことも再確認でした。少ない言葉でも分かり合えることや、違う立場の人に気兼ねする必要がないので、心の深いところまで話すことができたと感じました。そして、それを話して終わり、ではなく、全体のミーティングで聴いてもらえる、という、その先があったことも、意味深い話し合いにつながる要因

だったと思います。

全体ミーティングまで終えた今の感想は、対話をするということは、それ自体が目的になれるくらいパワーを持っているんだなということです。特に同じ立場の人の葛藤や工夫を聞くと、とても励まされる思いでした。共感し合えた自分たちの想いを発信したいと自然と思えましたし、全体ミーティングでそれをすることができ、さらに他のグループの方々とお互いにお話を聴き合うことができ、広がりを感じることができました。

障害者グループ

山崎 恵
DPI 北海道ブロック会議

障害者グループは、DPI 北海道ブロック会議というところで話し合いを行いました。DPI(Disabled People's International/ 障害者世界会議)という組織があり、DPI 日本会議というのが東京にあります。その北海道の地方組織がDPI 北海道ブロック会議であり、障害当事者の抱える様々な問題について、解決に向けてどのように行動したら良いのかということ協定、検討し、必要に応じて関係機関等にアクションをしているグループです。

ミーティングの目的

普段から私たち障害者は、社会の様々な場面(学校、仕事、交通機関、文化芸術等)から取り残されており、SDGsの「誰ひとり取り残さない社会」という言葉には強いインパクトがあります。これを実現するために、身体、知的、精神、発達及びその他全ての障害

児・者や社会的マイノリティの現状から、2030年の未来像を明確にするために、DPI 北海道ブロック会議内のメンバーの会議の中でSDGsについて話し合いをしました。

障害児・者の取り残されている現状とは

障害児・者の地域での日常生活の現状は、障害のない人の生活と比べると未だに同レベルではなく、差別、排除、制限、制約や格差および困難なことが、就学や就労、住宅など様々な場面でおこっています。

また精神障害等を理由として、公共施設の利用制限や資格取得を制限する欠格条項というのがあります。これは現在見直されてきていますが、一方で新たに心身の故障、精神の機能障害ということを理由とした法制度に基づく排除が強化されています。

外出時において車いす使用者の場合は、路線バスに乗車する三日前までの予約が求められたり、駅を利用できる時間帯に制限があるなど、公共交通機関を自由に利用できない状況があり、差別や合理的配慮(地下鉄についているホームドア、エレベーターの設置等)の不提供がまだまだあります。

保育、教育、就職の場面や、建物の利用、情報保障においても様々な障壁があり、障害のない子どもたちや大人にとって普通であり当たり前のことが、障害児・者にとっては時には排除され、時には様々な条件をつけられる現状で、やはり差別と、合理的配慮(点字や手話通訳、介護者の確保等)の不提供があります。

また、これもかなり深刻な課題ですが、私たち障害者は日常生活において介助を必要とする場合が多々あります。自分ひとりではできない衣服の着脱、食事、入浴、トイレなどには介助者の支援が必要ですが、その介助者が非常に不足している現状があり、特に医療

的ケアが必要な場合には生命に直結するため、常に不安と緊張の中で生活している状況です。介助不足によって、私たち障害者の生活はこのような不安と緊張の中にいます。

障害児・者が求める社会、未来 — 誰ひとり取り残さない社会をつくるには

国連の障害者権利条約というのがあります。皆さんは初めて聞く条約かもしれませんが、これは2006年12月に国連の総会で採択されたものです。日本は2014年にこの権利条約を批准しました。この障害者権利条約では、障害を理由としたあらゆる制限、制約、排除を障害者差別と定義するとともに、障害者が必要とするバリアフリーなどの対応を合理的配慮と定め、合理的配慮を提供しないことも過度な負担がない限り、障害者差別と定めています。

この障害者権利条約の目的は、障害があっても障害のない人と同等の生活を社会のあらゆる場面で実現することとしており、それは

障害者に特別の権利を付与するのではなく、障害があっても取り残されない社会の実現を求めるものです。

障害があっても、障害のない人と同様に利用できる公共交通機関とするために設置されたホームドアやエレベーター、または電光表示や段差を解消したノンステップバスは、障害者が利用できるだけでなく、様々な人びと、高齢者や妊娠中の女性等に安心と安全をもたらす社会的効果を生み出しています。札幌地下鉄に設置されたホームドアは、視覚障害者だけではなく、すべての人々の安全・安心を確保しています。誤って線路

に落ちる人や、地下鉄に飛び込んで自殺する人が減っているとも言われています。

誰ひとり取り残さない社会の実現をめざして

SDGsの最終年である2030年、札幌市は冬季オリンピック、パラリンピックの招致に向けて動いています。昨年、札幌市が冬季オリンピック、パラリンピックの招致をテーマとして開催した大規模市民ワークショップや区民ミーティングがありました。それらにおいて、大会の基本理念が「人と地球と未来にやさしい大会で新たなレガシーを」とされ、「すべての人にやさしい豊かな暮らしを創出」

することが示されました。

私たちは、障害者権利条約の完全履行と、SDGsのゴールであり札幌冬季オリンピック、パラリンピックの開催予定である2030年を目標に、札幌市や北海道において、障害があっても、障害がない人と同様に育ち、学び、働き、遊ぶことができる社会の実現をめざしています。

私たちに求められる行動

私たちは、障害当事者として様々な経験を糧に、誰ひとり取り残さないまちづくりに貢献します。私たち障害者が、障害者に必要なことに声を挙げていく、そして、行動を起こしていくということが、

誰ひとり取り残さないまちづくりにつながると思っています。

二番目に、私たち障害者は、属性のひとつであるにも関わらず、制限や制約、および排除を受けてきた立場から、コロナ等による現在の感染症、または人種、ジェンダー、出身、LGBTQ等を理由としたあらゆる差別を許さない社会の実現に貢献します。

三つ目として、私たち障害者は、多くの人々の支えにより生活しています。私たちは様々な、多様な人々とつながり、共に活動することで誰ひとり取り残さない社会の実現に寄与していきます。

誰一人取り残さない社会の実現をめざして

1. SDGs最終年（2030年）、札幌市は冬季オリ・パラの招致へ向け動いている→**残すべきレガシー**とは？
2. 同大会の基本理念：「人と地球と未来にやさしい大会で新たなレガシーを」「**すべての人に優しいまちへ**」
3. ここ北海道/札幌市を、障害の有無や様々なながいがあっても北海道で生まれ、北海道とともに育ち、ともに学び、ともに働き、ともに遊ぶことができる**共生社会の実現を北の大地でめざす**

私たちに求められる行動

1. **障害当事者としての経験を糧に、誰一人取り残さないまちづくりに貢献します**
2. コロナ等による感染症、人種、ジェンダー、出身地等を理由とした**あらゆる差別を許さない社会の実現に貢献します**
3. **多様な人々と繋がり、ともに活動することで、誰一人取り残さない社会の実現に寄与します**

地域コミュニティ (余市)グループ

本井 祐太
NPO法人北海道余市エコビレッジ推進プロジェクト

加入のきっかけ

2020年の2月6日、発起人であるNPO法人さっぽろ自由学校「遊」の小泉雅弘さんと、EPO北海道(当時)の大崎美佳さんにお声がけいただき、最初の会議に参加しました。その時点では、どれぐらいの組織が全体グループに集まり、どのようなアウトプットを社会に与えていくかのビジョンはまだ見えていませんでした。ただ、「さまざまなグループの人たちが分野横断的に意見や課題を共有し、

解決に向けた場づくりを果たす団体」の重要性については、参加者の多くが共有していました。

エコビレッジについて

エコビレッジとは、住民が互いに支え合う仕組みと、環境に負荷の少ない生活を志すコミュニティを表す言葉です。当団体は、2009年に長沼町でエコビレッジライフ体験塾を設立したことがきっかけとなり、2012年から法人化し、現在は余市町で活動しています。

私たちが目指すもの



1

環境負荷の少ない食糧生産や住まいに必要な適正技術を学び、地域における実践者を育てます。

2

ひとりひとりの個性が発揮されるとともに、組織やコミュニティの中で互いの多様性を尊重しながら協調するためのコミュニケーションやグループワークを学びます。

3

貧困や環境破壊を産むグローバル経済に対して、地域で分かち合うための「しごと」や「仕組み」を提案し、ローカリゼーションを実践します。

私たちの活動は、大きく3つの柱があります。一つ目は化学肥料や農業に依存しない食糧生産や、薪割りなど、環境負荷の低い暮らしをスタッフや会員さんの協力を得ながら実践すること。二つ目は国際交流・地域交流で、国内外からボランティアを受け入れて、地域行事の手伝いや国内留学の受け入れなどを行っています。三つ目は研修・視察の受け入れで、企業からのSDGs研修の受け入れや、JICA 専門家の研修の場を提供しています。

グループミーティングについて

「地域コミュニティ」のグループとして、①3月15日のビジョン会議(会員・地域住民対象)、②10月21日の高校生200名へのSDGs研修、③12月9日のビジョン会議(会員・一般参加者対象)の3つの取り組みを実施しました。

①のビジョン会議では、EPO北海道の大崎美佳さんにご協力いただきました。エコビレッジの会員や、余市町在住の企業の方、農家の方にお声がけし、SDGsの視点を加えた10年に渡る活動の振り返

3/15 アウトプット

合成洗剤なくす
エネルギー自給
モンガクから電線なくす

環境

地域

オーガニックな食を楽しむ場
自分の食糧を作れるように
フードロスなくす

食

学び

えこびれ社会学校
地域の次世代を育てる場
フォルケホイスコーレ(成人学校)
百姓学
社会実験の場(exお金を使わない社会)
自立した人間を育成
スタッフの経験を共有財産として残していく
いざという時に生きていける人間を育てる
スタッフが講師として派遣、出前講座 **2020実現**
地元の子どもの課題学習の場 **2021実施予定**

余市をコーディネート・ネットワークする場
地産地消モデル
有機農業地帯へ
若者がキャンプしながら農作業 **2020実現**
離農した農家の承継、農業に留まらず
モンガク地域全体がえこびれ化
若い人が地域に戻ってくる魅力と仕組み

お金・仕事

持続可能な畜産、ローカリゼーション
タイニーハウス、別荘利用
プレミアムワインの販売 **2020実現**
余市産食材・商品の通販 **2021実施予定**
オーガニック野菜・果物の直売所

広がり

えこびれ全国展開
世界中から巡礼者が訪れる
国際理解、多様性を進める場

2020実現

りと、次の10年で達成すべきビジョンについて話し合いました。寄せられたテーマは「環境、地域、食、お金・仕事・学び・広がり」と多岐に渡り、オーガニックな食を楽しむ地産地消のモデルの場や、余市町をコーディネートする場などの役割を期待されていることが分かりました。ここでいただいたアウトプットの中には、その後訪れたコロナ禍における新しい取り組みのヒントが含まれており、いくつかの事業における実現の礎となりました。そこで2020年

度はビジョンの部分を特に重要視して、withコロナ時代における次の10年の地域ビジョンの模索に注力することとしました。

②のSDGs研修は、当団体を含む8つの現場で働く方に講師となっただき、農業・漁業・歴史・アイヌ文化・ジェンダー・生物多様性・福祉・エネルギーなど、多様なテーマで研修を行いました。研修後にグループワークを設けて、道外の高校生という異なる立場から地域の社会課題を見出してもらい、意見をいただきました。「日本

12/12 アウトプット

オンライン参加者の回答（一部抜粋）

- 小さな野外保育園
- LGBTQ+の方々もいる。
- 上の世代から生活の知恵が受け継がれる。
- 多様な世代の人達が一緒に暮らしている。
- 貨幣価値に支配されない（お金の要らない）世界
- すべての人（特にアイヌの人たち）に仕事を。
- 地域内で食べ物・エネルギーが調達されるコミュニティ

地域の自立（経済・資源・人）

でも都市と農村部の格差が起こっている」、「田舎に住んで少しでも若い人を増やしたい」。たった1日だけ地域に訪れた高校生であっても、自分目線で地域の社会課題をとらえ、解決策を考えてくれることに驚き、同時に次の世代への希望を感じました。当日のスタッフを務めた北海道大学の学生からも、「田舎的な場所、魅力的な人の資源、持続的な産業」など、地域の良さをたくさん学んでいただきました。③のビジョン会議では、初のZOOMによるオンラインのアイデ

ア会議を実施しました。そこでは子どもやお年寄り、LGBTQ+の方々など、「多世代・多様な人々が包含」されていること、また、地域が自立し、「経済・資源・人が地域内で循環」される仕組みづくりを求める声がありました。このアイデア会議はまだ始まったばかりで、今後も活動を支えてくださる会員や地域の方々の意見を伺いながら、次の10年のビジョン作りと、具体的なアクションに結び付けていきたいと考えています。

10/21 アウトプット

高校生の感想（一部抜粋）

アンケート解析・情報共有：
北海道大学大学院農学院
花卉・緑地計画学研究室 林和沙さん

- 日本でも（都市と農村部の）格差が起こっている
- 人手不足によって、やめてしまう農家さんがいる
- 担い手が不足しているのなら持続可能と言えないのでは



- 田舎に住んでその地域で少しでも若い人を増やせたら
- 問題を解決するのは大人だけではなくこれから大人になっていく現代の人たちが意識していくことが大切

NGO・NPO グループ

小泉 雅弘

NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

NGO・NPO グループは、2018年、2019年とCSO（市民社会組織）ミーティングという形で、公開のミーティングを開催してきました。しかし、今回はコロナ禍という状況の中、予定を立てにくく、動きだしは遅れました。

それでも、北海道 NGO ネットワーク協議会でグループミーティングの開催を提案したところ、田中肇さん、伊東博美さんの2名が運営メンバーに名乗りをあげ、北海道 NPO サポートセンターの定森光さんも加わって9月に私を含む4名で打ち合わせを行いました。今回のミーティングについては、コロナ禍の影響でオンラインでのミーティングとなること、NGO・NPO としてのスタンスを強く打ち出したいことなどから、公開にはせず、あらかじめ候補に挙げた方々に個別に参加を呼びかけました。その結果、国際協力、環境教育、

地域づくり、生活困窮者支援などに関わる16名の道内 NGO・NPO のリーダーたちが11月に行ったオンラインミーティングに参加しました。

ミーティングでは、事前に集めておいた「3つの問い」についての回答をもとに、各自の意見を紹介していきました。

はじめに、問いの1と2「私たちはどのような未来をつくりたいのか?」「それを実現できる目処は立っているか?」への回答に沿って、各々のめざす未来像と現状の問題について共有しました。めざす未来としては、「地域が元気な社会、ローカルを優先する社会」「市民自治が実現した社会、対話が尊重される社会」「社会的包摂が達成される社会」などのビジョンが出てきました。

それに対して、現状の課題とし

ては、「地域間や個人間の経済格差、コストの外部的」「対話が成り立たない状況」「個人主義の弊害」「変える勇気と想像力の欠如」などが挙げられました。

つぎに、問い3「ギャップを埋めるためには何が必要か」について話し合いました。NGO・NPO として社会課題の解決に日々取り組んでいるメンバーなので、自分たちの活動に即した意見が多く出されました。ひとつは、学ぶ場、対話の場を広げていくこと。もう

ひとつは、仕組みや制度に反映させること、そのための政策提言。また、NPO や NGO 自体の社会的な価値を高めていく、そのために共感者を増やしていくこと。成功体験の共有が大切という意見もありました。

こうした意見の中で、ひとつ議論の呼び水となったのは、対話が成り立たない状況の中で「大きな力（権力）と闘うにはどうしたらよいか?」という問題提起でした。これは、自分たちの地域で生じて



いる問題（核のゴミの受け入れ問題や新幹線のトンネル残土問題など）に対し、話し合おうとしても対話にならないという具体的な状況を踏まえての問いかけでした。

11月の意見共有を踏まえ、議論を深め、課題を整理するために12月に9名で第二回目のミーティングを行いました。このミーティングでは、1回目に議論になりかけた「大きな力（権力）と闘うにはどうしたらよいか？」という問いをもとに話し合いをスタートしました。

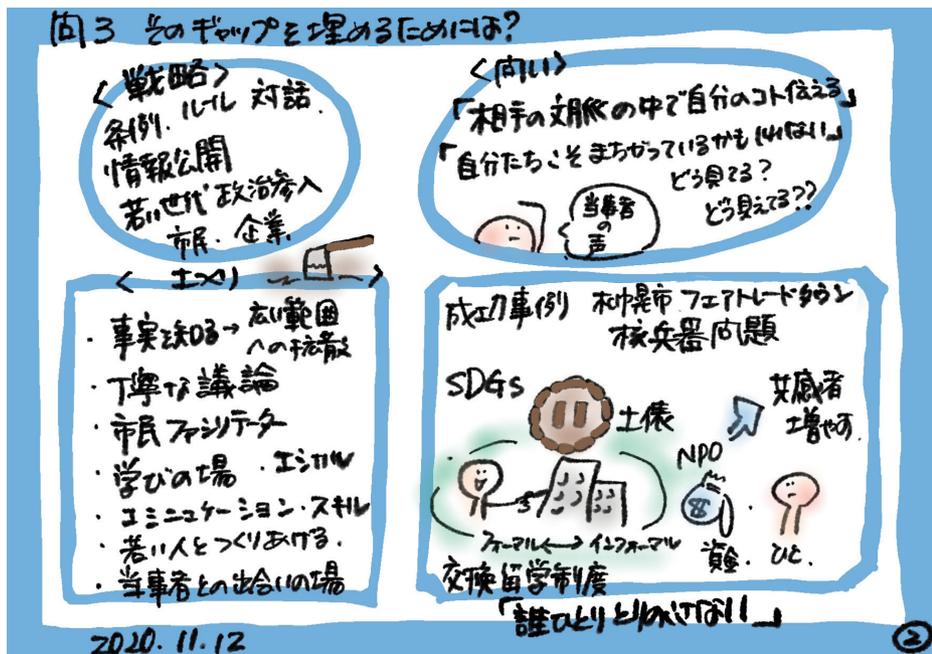
議論の一つの焦点は、ネットワークを広げていくということでした。NPOがそれぞれの専門性を活かすこと、また、様々な専門家とのつながりをつくっていく必要性などが語られました。また、NGO・NPOが政治的な課題から距離を置く傾向の見直しが必要という意見もありました。

もうひとつは、自分たちの声をどのようにして周囲に、とりわけ次世代に伝えていくかということ。一見、若者は社会問題に関心が薄

いように見えるが、きちんと伝えようと響く。そもそも大人が本質的なことを伝えてこなかったのでは？という話が出てきました。また、ポジティブに未来を語ること、若者を育てるというより主体として扱うこと、自分が正しいと思わずに相手が受け入れやすい方法を模索することなどの指摘もありました。

様々な社会課題に取り組んでいるNGO・NPOにおいても、それぞれ自分たちの目の前の活動に追

われがちで、共通の大きなテーマで各々のビジョンを共有したり、話し合ったりする機会はこれまで意外となかったように思います。ミーティングの中でも、近年、市民活動団体が分野を超えて一堂に会するような大きな集まりがないという指摘がありました。SDGsは、そうした対話の土俵になり得るのではないかと思います。



NGO・NPO ミーティング参加者（五十音順）

■第1回オンラインミーティング（2020年11月12日）

- 小川遼（北海道労働と福祉を考える会）、加納尚明（札幌チャレンジド）、萱野智篤（フェアトレード北海道）、草野竹史（ezorock）、小泉雅弘（さっぽろ自由学校「遊」）、定森光（北海道NPOサポートセンター）、佐藤雅一（北海道YMCA）、島田祐亮（飛んでけ！車いすの会）、高木晴光（黒松内ぶなの森自然学校）、高橋勇造（Kacotam）、立石喜裕（北海道NGOネットワーク協議会）、田中肇（北海道NGOネットワーク協議会）、猫塚義夫（北海道バレスチナ医療奉仕団）、フルスト・ピアンカ（八剣山エコケータリング）、宮島豊（北海道バレスチナ医療奉仕団）、宮本奏（ファシリテーションきたのわ）

<進行：田中肇／グラフィック：高橋明美／記録：伊東博美（北海道NGOネットワーク協議会）>

■第2回オンラインミーティング（2020年12月3日）

- 伊東博美、萱野智篤、小泉雅弘、佐藤雅一、島田祐亮、高木晴光、田中肇、猫塚義夫、フルスト・ピアンカ、宮島豊

<進行：小泉雅弘／記録：伊藤博美>

研究者グループ

山中康裕
2050年委員会
北海道研究者有志の会

国連100周年にあたる2045年を目指した「国連75周年の3つの問い」を知ったとき、まず思い浮かべたのは、東日本大震災の直前の2011年2月、私が提唱した2050年委員会のことです。2050年は今でこそ多くの人が知るようになってきた気候変動にとって節目の時です。誰でも、行政の審議会委員のように、〇〇町2050年委員会、町内会、お店などの2050委員会を作って、普段話さない未来を語ろうという運動でした。道内のいくつかの市町村や団体で開かれましたが、出口が見えず、それっきりになっていました。国連の問いは、2050年委員会に近く、3つの問いの形で、バックキャスト的に、行動までを問う3ステップになっています。今、国連のSDGsが含まれている「2030アジェンダ」のタイトル「我々の世界を変革する」のもと、多くの人々が未来を語らね

ばならないときが到来したのだらうと思います。もう一つ思い浮かべたのは、昨年末のオランダ最高裁の判決「気候変動対策に取り組まないことは人権侵害」を受けて、現世代が「仕方がない」ということで諦めて何もしないことは、「不作為の罪」に他ならないということです。特に、研究者は、ある程度未来が見えている人たちです。いわば「真実を知ってしまった者の責務」もあります。

北海道の未来を語る人々に声を掛けました。集まったメンバーは7大学の10人、五十音順に明田川知美、有坂美紀、石井一英、太田稔、岡田直人、金子正美、岸邦宏、樋口ゆかり、山中康裕、佐藤志穂（敬称・所属略）です。今回の男女比は6:4となりました。ググって下されば、それぞれの専門や活動が分かります。昨年10月23日、それぞれ「3つの問

い」への回答を宿題として持ち寄り、2時間議論しました。10月29日、修正したものを持ち寄り、再度2時間議論しました。今回、持続可能な北海道に向けて、何をせねばならないか、何が問題点なのか、独立して答えられる精鋭揃いでした。持ち寄ることで、誰のオリジナリティなのかハッキリし、短時間で議論できる、そんな研究者のプライドをかけた議論ができました。

「国連75周年の3つの問い」に

対する研究者グループの回答は、図1～3のようになりました。我々が認識している現状の多くは、我々の作りたい未来には結びつかないものです。それだけで延々と議論が出来そうなネタがありましたが、それらは問2の「現状の延長では目処は立たない」という回答になりました。多くの人から、「技術的には可能だが…」という意見が出されました。でも、意識の変容の兆しも沢山あるのです。まず、次世代の人権侵害という判決、女性

1. 私たちはどのような未来をつくりたいのか。

多様性(diversity)・包摂性(inclusive)のある社会

- 誰一人取り残さない、社会的弱者を排除(exclusive)しない未来
- 多様な人々が尊重し合う社会となっている(出自によらない平等が達成されている)未来
- 自然との共生、自然の多様性が尊重されている未来
- 子どもの権利が保障される・性別を理由とした差別や暴力がなくなる未来

分散化・地方分権化が健全に進んだ社会

- 個人=家族=地域=市町村=国=世界は、緩やかに役割分担している(境は低くなる)未来
- 地域が世界の地域とネットワーク化(Region to Region, R2R)した未来
- どこにでも、環境に優しい公共交通ネットワーク、および、高速インターネット環境が保障される未来
- どこにでも、分散型オフィスで働きテレワークができる、(この時代に必要な)教育が受けられる未来

経済至上主義から幸福経済に移行した社会

- 人々の価値観・意識の変容した未来(例：社会的弱者への支援ではなく、投資と考える)
- 幸せの再分配(含ベーシックインカム)がされる未来
- “ひっそりと世界に誇れる北海道”に貢献する人・企業が流入する未来

Well-being

物質とエネルギーが健全に循環している社会

- エネルギー・製品・資金を地域内で循環させ、ゼロカーボンを実現している未来。
- アイディア、エネルギー、地場産品を量より質(高付加価値・少量生産)で国内外に輸出している未来

©北海道メジャーグループ・プロジェクト 2020 研究者グループ(2050年委員会-北海道研究者有志の会) 取りまとめ：山中康裕 qalapan@gmail.com

首相のスコットランド・アイランド・ニュージーランドが幸福経済(well-being economy) 国家を宣言したことです。世界各地には、移動困難を生まない地域運輸連合や少量生産・少量販売のビジネスモデル等があり、エッセンシャルワーカーやベーシックインカムという考え方も拡がり出しました。我々の欲しい未来は、まさにSDGsの理念そのものです。多様性・包摂性、分散・分権化が健全に、経済至上主義から幸福経済へ、物質とエネルギーが健全に循環し

ている…といったことが、問1「私たちの作りたい未来」となりました。

研究者はどう行動すべきなのでしょう。問3に対して、我々の能力や立場を活かし、人々を繋ぐことと回答します。行動しなければ「不作為の罪」に問われます。それは、社会の在り方を問う世代・立場を超えた議論・提言する集団、および、我々が作りたい未来に必要な教育や科学的判断ができる仕組みを創造することです。

今回の話し合いは、問1「私たちの作りたい未来」に向けた「小

さな第1歩」です。今回のような話し合いは、各自にとっても各自の発想を豊かにする大切なものであり、ゆるく続けていきたいということになりました。「不作為の罪」にならないために、まず行動を始めないと…



2. それを実現できる目途は立っているか。

現状の延長では目処は立たない

- ✓ 民主主義・経済至上主義がグローバル化・AI化で形骸化・加速する(参考: ユヴァル・ノア・ハラリ「ホモデウス」)
- ✓ インターネット・AIが国境・言語を越えた情報流通を創出する一方、情報格差・注意経済・ポピュリズムも創出
- ✓ 戦後、産業界に均質な人材を供給する学校制度→地域の個性を失い、都会に憧れ、世代間の隔絶を生む
- ✓ 北海道の2050年の人口は2020年比71%だが、道央圏を除くと人口半減。現居住地の47%が無居住になる
- ✓ 道内高校がないのは54市町村、1校のみ89市町、2校以上36市町村。2050年には高校が選べるのは10市町村程度
- ✓ 象徴: ジェンダー・ギャップ指数(WEF, 2019)では、日本は男女格差121位/153カ国
- ✓ 中央政府による地方創生: 地域の個性を無視した万能薬(panacea)はない

人々の意識の変容の兆しはある

- ✓ オランダ最高裁「人権問題として気候変動が捉える」判決(次世代の人権侵害) →即ち「諦める=不作為の罪」
- ✓ スコットランド・アイランド・ニュージーランド(女性首相)が幸福経済国家の宣言(スコットランド: 生理用品無償化)
- ✓ ドイツ: 「学生/芸術家=社会に不可欠な人々」→エッセンシャルワーカー≠(誰でも出来る=低賃金職業)の概念
- ✓ イタリア: 各地域が「少量生産・少量販売」するビジネスモデル
- ✓ ベーシックインカムなど新しい仕組みが徐々に広まり、また、グローバル化への心理的距離感の変化
- ✓ 何と言ってもSDGs やこの会の開催。そして、若者の行動の変化(従来と異なる、何か新しいやり方の模索)

(人々の意識の変容が不可欠だが) ICT技術の進展など技術的には可能

- ✓ ドイツ: 様々な形態の移動サービス(MaaS)が連携した各地に運輸連合が組織され、公共交通を運営
- ✓ 再生可能エネルギーの時間的変動を補う技術(水素等で貯蔵)はあり、時空間を超えた正味の利用率が向上
- ✓ インターネットを活用したオンラインをフル活用した高校(N校)の登壇やクラウドファンディング等の新しい仕組み

©北海道メジャーグループ・プロジェクト 2020 研究者グループ(2050年委員会・北海道研究者有志の会) 取りまとめ: 山中康裕 qalapen@gmail.com

3. そのギャップを埋めるためには、どのような行動が必要か。

研究者は、その能力や立場を活かし、人々を繋ぎ、持続可能な世界や人々の幸せを構築する責務を担う。→「行動しない=不作為の罪」?

- ✓ 物事の本質を明らかにする能力、対話する能力、社会から負託され、次世代を育成する立場
- ✓ 社会的意思決定における透明性、説明責任、主体的な参加を確保するに對する専門的知見の提供
- ✓ 各自の専門性に基づいた創造: CSW, 対話, 脱炭素(循環と共生), 新価値基準, 企業改革, 網羅的公共交通, 新教育等

社会の在り方を問う世代・立場を超えた議論・提言をする場集団づくり

- ✓ 社会は、行政は、教育は、何のためにあるかという、Well-beingに関する「そもそも論」を議論・提言すること
- ✓ 多様な立場(セクター)が協働・互恵するように
- ✓ 地域特性(歴史・風土・文化・資源)を活かした・尊重した合意形成

学校教育の意義・内容の見直し、および、大人の学びの創出

- ✓ 多様性、包摂性を学ぶ教育と、それらの確保(地域格差・所得格差・通信格差・情報格差の排除)
- ✓ 伝統を尊重し(基礎科目・リベラルアーツは重要)、学びの原動力となる学校と社会の融合した学び
- ✓ 民主主義における政治と社会の意識改革、および、それらを支える大人の学ぶ努力
- ✓ GDPを高める学びからWell-beingを高める学び

データを得て、共有し、議論し、行動し、検証する柔軟な仕組みの創造

- ✓ 世界中のどこからもアクセス・コミュニケーション出来るオープンデータ
- ✓ エビデンススペース(含歴史)の議論をするための調査研究
- ✓ 科学者からの一方的な享受にとどまらない互恵性の確保

©北海道メジャーグループ・プロジェクト 2020 研究者グループ(2050年委員会・北海道研究者有志の会) 取りまとめ: 山中康裕 qalapen@gmail.com

企業グループ

清水 誓幸

北海道中小企業家同友会産学官連携研究会

企業グループで集まった7名は、私と太田明子さんの2名でSDGs及びCSRに取り組まれている方5名の経営者、企業人、法律家の方に声掛けして集まっていたいただき、全体でのミーティングをzoomで3回、その後私が一人一人とインタビューし、最終的な統括を太田明子さんと纏めました。

ビジネスとは、企業が行う社会活動の一環であり、社会とつながり、ひいては地域活動や家庭、そして個人の幸福につながるものであり、地域に暮らす人々や働く人々の多様性に応じて変革し続けるものであると考えます。ミーティングを経てSDGsやCSRに取り組む企業は北海道内でも増えてきていると感じることが出来た半面、課題も見えてきました。補助金や助成金ありきのビジネスモデルや雇用、入札の加点目的による心無いボランティアやCSR活動、ジェン

ダーバランス、ダイバーシティ化が進まないままの雇用、以上のような事で目的に反する心無い行動や企業側優位の雇用が続いていると考えられます。北海道ESD活動支援センターのデータでは各振興局にSDGsに関することでの相談件数109件の内企業からの相談が29件と、比較的多いのでは？と見える反面、帝国データバンク札幌支店がSDGsに関する道内企業の見解について調査を実施した結果、自社におけるSDGsへの理解や取り組みについて、「意味および重要性を理解し、取り組んでいる」企業は6.6%。「意味もしくは重要性を理解し、取り組みたいと思っている」(12.1%)と合わせて、企業の18.7%が積極的ではありますが。しかし、「言葉は知っていて意味もしくは重要性を理解できるが、取り組んでいない」(33.7%)が3割超となり、「言葉は知っているが意

味もしくは重要性を理解できない」(16.2%)も含めると、半数近くがSDGsを知りつつも取り組んでいないという結果です。(調査期間は2020年6月17日～30日、調査対象は道内1125社で、有効回答企業数は563社(回答率50.0%)

この結果企業はSDGsのステークホルダーであるという認識がある企業が少ないという結果ともいえます。世界の17の課題目標は人間すべての目標であり、経済活動によって起こしている課題は企業の責任でもあると考えますが何故この様に認識が増えないのか？集まった我々は話し合いました。

ミーティングで出された「理由」

はあくまでも仮設ではありますが、「事業を継続するのがやっとならぬ余裕ある会社がやれば良い」「これは大企業が作った問題では?」「政府が法律で定めたら良い」「働く人々に余裕が無いため、企業内部でも関心が深まらない」などが出され、その中でも働く人や企業が社会課題に関心を持つ余裕が無いのでは?という説に対して話題が深掘されました。

企業経営、働く人に余裕が無いとは、働いても働いても利益が出ない収入が上がらない、何もかも出来る人が望まれる会社なので肩身が狭い、スキルアップしたいけど時間もお金も余裕がない、この

企業が長らく 患う問題点

1

- 社会課題に係るビジネスモデルが作れていない
- 非正規雇用が多く、正社員との格差が大きい
- 行政の加点制度による企業のひずみ
(行政の問題)
(心無い社会貢献活動など)
- 従業員は働くことに必死で、地域活動や自己研鑽の
余裕がない
- 本質が理解されていないままの男女共同参画
- 個人の個性を重んじることなく、同一化せよとする古い風土
- オールマイティな人材ばかり求め
残業する人、休まない人が高い評価

企業課題から 生まれる働く 人の課題 ②

- ・ 社会課題への無関心
- ・ 利己主義
- ・ 心身への弊害
- ・ 実在的虚無感
- ・ 格差

様な話題に繋がっていきました。この事について社会ではダイバーシティが叫ばれていますが、実際には社会でダイバーシティ化が殆ど進んでいないのではないのでしょうか？生産性を高め働く人の収入を上げていくことが企業の使命の1つでもあると考えますが、生産性が低いまま事業変革を起こさずに継続されている企業も多い現状だと思います。そして古くからの社会構造に安住し、企業活動と社会は一体であることを頭では分かっている行動では表していないことが原因では無いか？と考えました。企業がダイバーシティ化と生産性の追求を同時に進めるこ

とで確実に強くなっていき働く人々は豊かになっていく！と言うサンプルが社会にあちこち出てき、その企業が目立ってくると、意欲のある企業は変革を恐れなくなるのでは無いでしょうか？

また、ユースや社会や消費者はダイバーシティ化や生産性追求を行っている会社を知り、評価し選ぶ風潮が広がると、企業の取組も加速化するのではないかとそれによりゆとりのある豊かな生き方が出来るようになり、社会課題を自分事と考えられる企業、社会人が増えていくのではないかと？日本社会は先進国の中でも類のない人口減少に進んでいる、そして先進国

の中でも生産性が低い国となっており、尚且つ先進国の全ては過去20年で1.8倍に収入に上がっていますが、日本は9%下がっています。そして社会では長時間労働、有休休暇の取得、同一労働同一賃金などの問題が持ち上がり、働き方改革関連法が制定され施行されました。これは予測と結果であり、それに対して企業は法律に順応することを課せられているケースが多いと考えられます。この様に法律で課せられて雇用環境改善を行っている企業は政府の目的を理解せずに押し付けられた対応となり「心」が備わらないのではないのでしょうか？

北海道は中小企業の中でも小規模事業者が圧倒的に多い地域であります。しかしそれがSDGsや社会課題への関心度と比例するとは考えたくありません。中小企業、小規模事業者こそ地域社会との関りは深いのですから、社会課題の解決と事業をリンクさせた商品づくりサービス作りが生まれることで地域と一体化した持続する企業が育つのではないかと考えました。

当グループの結論として、企業が「人」への「心」を備えて社会課題に向け変革し、その企業を社会が選ぶことでSDGsの全ての目標が解決するのではと考えています。

私たちはどの ような企業を 目指すのか。

- ・ 社会の多様性に応じて変革し続ける企業
- ・ 社会や社会活動の循環の中で、自社の起つ位置を強く持つ企業
- ・ 事業が社会課題の解決につながる取組を行う企業
- ・ フェアな取引が常識の企業
- ・ 社会の全ての人に向き合い、ダイバーシティ化 インクルージョン化を図る企業
- ・ 生産性向上による豊かさを追求し続ける企業
- ・ ワークライフバランスを働く人目線で取組む企業

全体ミーティングの 報告

全体ミーティングの報告

小路 楓

北海道地方 ESD 活動支援センター

全体ミーティングではそれぞれのグループミーティングで話された共通の問い（「私たちはどのような未来をつくりたいのか」「それを実現できる目途は立っているか」「そのギャップを埋めるためには、どのような行動が必要か」）に対する結論や過程について10分程度で発表し、未来のために自分にできる貢献を考えるため少人数に分かれて意見交流を行いました。当日はそれまでに開催したグループミーティングへの参加は関係なく、本企画に興味関心のある人、社会的属性の様々な48人が参加しました。それぞれのグループミーティングにはどのグループも5人以上が参加していて、このプロジェクトに関与した人の数は総勢100人以上でした。こうしたことだけでなく、本企画は多様性を1つのキーワードとして含んでおり、生活に密着した切実なことを発表するか

からこそ、関係者からは「立場の違う人には理解して（受け入れて）もらえないかもしれない」といった不安や心配が多かったのです。それでも、特に関係者が納得する形で企画の設計をして開催にこぎつけたのは、まさしく対話のなせる業であったと思います。

実は、企画設計の打合せは毎回楽しいものでした。楽しいというのは、個人的なことを話せる仲の良さというよりも、生産性とリスペクトにあふれていて安心できた、と解釈してください。生産性があったということについては、社会人1年目の私が考えてきた、いまいちうまくまとまらない案に対してそれぞれの立場で積極的に発言があり、意見の発散を踏まえたうえで「じゃあどうしようか？」を前向きに対話することができたということの意味しています。北海道の将来を考えたい、他者を尊重し

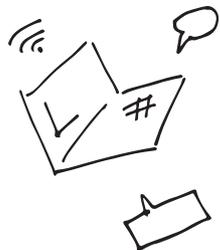
ながらよりよい未来を迎えたいという思いが同じであったため、社会的属性や年齢層が違ってバックグラウンドや事情の説明から始まる丁寧な発言が行われました。しかしこれは準備段階に限った話ではないように思います。

全体ミーティングでもそれぞれの立場が尊重されていたと感じています。参加者間の交流では、言語障害のためチャットで参加する人や考えがうまくまとまらなくて言葉にならない人でも、そうしたそれぞれの違いを踏まえてフラットな目線で対話が行われていました。プロジェクトを通して、誰一人取り残さない気持ちを持つ人が集まり、未来について話すことができたことは収穫でした。また、事後アンケートからは「〇〇の立場の人がこんなことを考えている・困っているなんて全然知らなかった」といったことをはじめ、参加



者に多様な気づきがあったことがうかがえました。これはとても新鮮で、主催チームにとってはうれしいことでした。参加者アンケートを見ながら後から気づいたことですが、全体ミーティングでは一般的に「大事だ」と言われることに実感を伴うための体験が行われたのだろうと感じています。

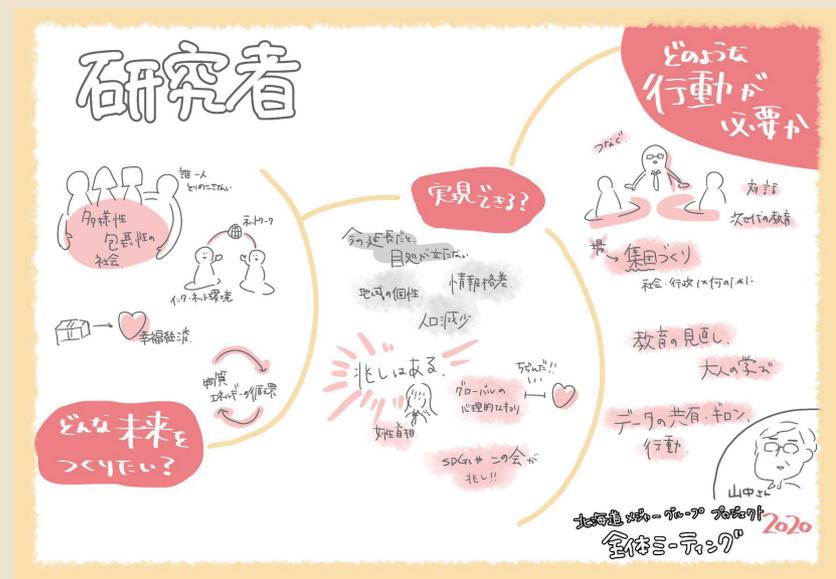
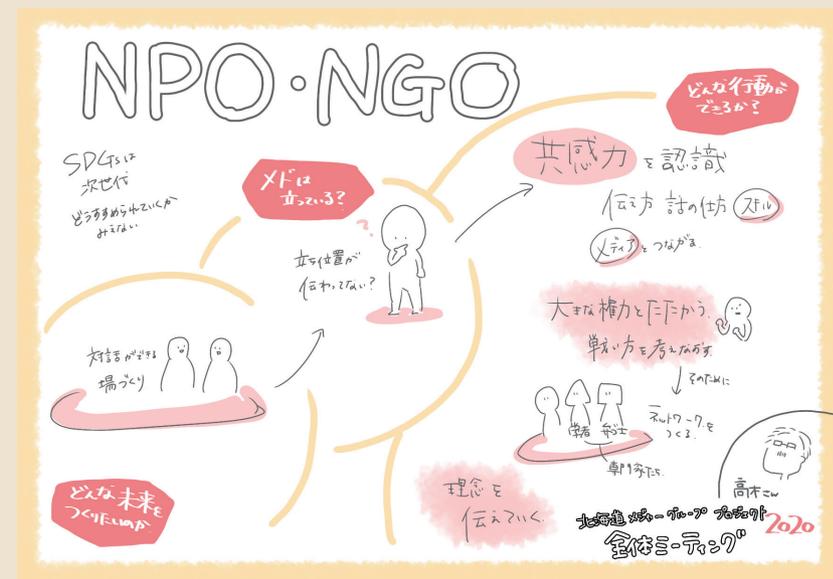
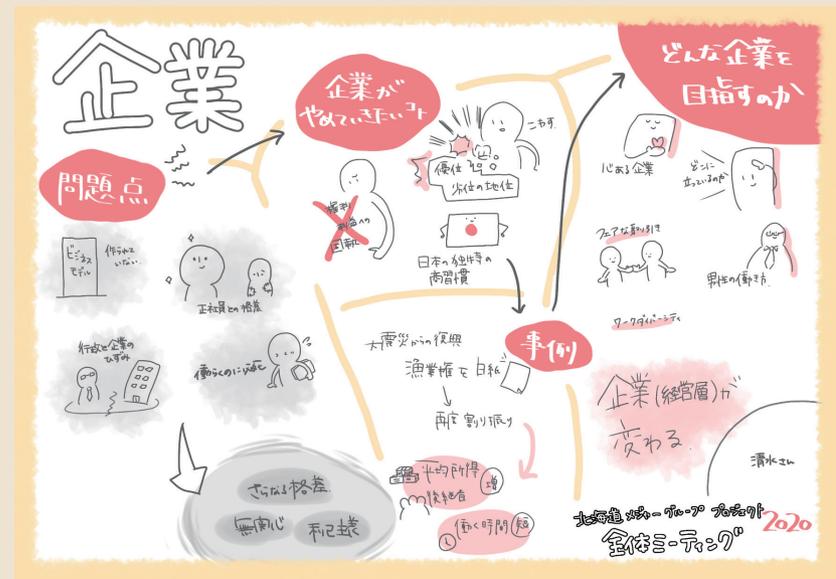
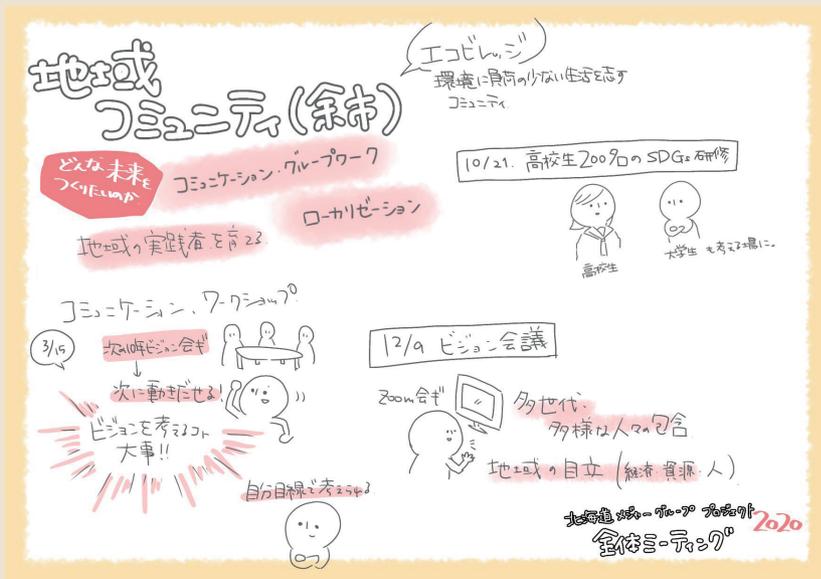
今回、新型コロナウイルスの感染拡大を考慮しオンラインでの開催となりました。オフラインで開催するよりも難しいと感じる点が多いですが、物理的距離関係なく話ができるのは大きなメリットでした。札幌圏以外の道内だけでなく、興味のある道外在住者の参加もありました。今後、全体ミーティングで、よりリアルに近い対話や協働が行われるための仕組みをつくっていくことが主催チームの宿題です。



グラフィックレコーディング

全体ミーティングでの各グループの発表をグラフィックレコーディングでご紹介します。

担当：北海道大学環境科学院 修士課程2年 宇都幸那



北海道

メジャーグループ

プロジェクト 2020

座談会

ふりかえり

参加者

司会

NPO・NGO グループ

NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

小泉 雅弘



ユースグループ

北海道地方 ESD 活動支援センター

小路 楓



女性グループ

札幌市男女共同参画センター

久世 ののか



2021年2月27日14時から
オンラインで行われた座談会の
一部を記録、編集したものです。

ユースグループ (進行)

任意団体「話をしよう」

(現: snug)

長谷川 友子



研究者グループ

北海道大学地球環境科学研究院

山中 康裕



障害者グループ

DPI 北海道ブロック会議

山崎 恵



企業グループ

北海道中小企業家同友会産

学官連携研究会 HoPE

清水 誓幸



小泉雅弘 (NPO・NGO グループ 以下、小泉): 司会を務めます、小泉です。

各グループの参加者は、全体ミーティングで初めてほかのグループの報告を聞き、
いろいろな方とのグループディスカッションをしました。どんなことを感じたか、何
を受け止めたかを自由に話してください。

清水誓幸 (企業グループ 以下、清水): みなさんのお話を聞いて、企業
の社会的責任は大きく、全部自分たちに関わるのだと思いました。特に、
企業の経営層に、無意識の偏見が大きいだろうし、その状態の中では、心
の入ったダイバーシティ化は難しいんだろうなと。

僕ら企業グループは、働く人に対して活動したいと思います。経営をど
うするかということは、それぞれの企業のあり方やスタンスがあり、そこ
にSDGsは関わってくるけれども、僕ら企業グループの中では、働く人の
ことを徹底的に考えていきたい。働く人の環境に対して、積極的に取り組
んでいる会社はどんな会社なのか、どうしたらそんな会社が市民から選ば
れるのかということを探求して行って、そういう会社が増えていくような
取組をしたいなと思っています。

久世のののか (女性グループ 以下、久世): 参加してみて大きかったのは、
自分たち以外の顔が見えたことです。立場上よく、「全てのゴールでジェ
ンダーに関するターゲットがありますよ」ということを言ってはいるので
すが、じゃあSDGsの5つめのゴールである「ジェンダー平等を実現し
よう」以外で、どんな人が動いているのかは、見えていませんでした。私
たちは企業の中のダイバーシティを提案するけれども、企業側の人たちが
どう考えて、何を大事にしているのかということについて、全体ミーテ
ィングをとおして輪郭が見えてきたことが印象的でした。

また、ユースと女性のもやもや感というのは似たようなところがあって、
「こういうことにもやもやしています」というのを伝える先が、企業グル
ープだったりするんだなと思いました。

そういった道筋が見えてきたなということと、SDGsを経由して既につ
ながっていた農民グループ、地域コミュニティグループと直接同じ場で話

せたことで、この人たちと、この後どうアクションしていこうかなというのを、より真剣に考えられるようになりました。あとは、具体的なアクションにどうつなげるのが大事だと感じました。

それから、安心して話せることが大事だなと思っています。準備段階で打ち合わせをしていくうちに、「この場だったら私が思ったことを聞いてもらえるな」という安心感が生まれました。全体ミーティングでも、そうした前提の上で、それぞれのグループが発表できるのが大事だなと振り返ってみて思いました。

山崎恵（障害者グループ 以下、山崎）：参加してみて、ほかのグループの課題を聞いたのがよかったです。SDGsに向けては、特に日本の社会の現状と、国連で言っていることとの乖離が、まだまだ大きいと感じます。実質もう10年ないですけど、果たして、本当にSDGsに向かっていけるのかという疑問や不安があるというのが感じられて、そうした現状は、障害者グループだけではないんだなと思いました。

障害者グループ、DPI北海道ブロック会議自体はSDGsだけではなく、既に日常的に課題があるので、あくまで障害者に特別な特権を与えてくれというわけではなく、ずっとこれから先も議論し、行政に対してはたらきかけ、誰ひとり取り残さない社会、誰ひとり差別や排除や制限をされない社会を目指し、人権に対する活動を続けていきたいと思います。

小泉：DPI北海道ブロック会議などでは、公的機関に対する提言活動は既にされていますよね。ほかのグループと一緒に包括的な形で取り組むことに、当事者としてどこまで意義があるのかも、私自身、正直分からないところでもあります。

実は、私は先住民族のグループが実現すればいいなと思っていましたが、ちょっと声かけに躊躇する部分もあり、今回は実現しませんでした。直面している課題があり、既に声を上げている人たちにとって、メジャーグループのような動きと結びつけることは、どこまで意味があるのかな…という迷いがあります。

長谷川友子（ユースグループ 以下、長谷川）：私が参加して思ったのは、このプロジェクトを続けた結果、何十年後に、全ての人にとって意味がある形に変わっていく可能性があるということです。今は、全ての人に対して分かりやすく、納得されるものではないかもしれませんが、それでも意味があると感じました。

また、今後プロジェクトを通して、グループ間のパートナーシップを強めていけるだろうという兆しを感じました。

小泉：万人向けではないということですかね。そのあたりを、どう当事者が受け止めているのかが気になったところでした。

山中康裕（研究者グループ 以下、山中）：学生時代からの友人が、「誰ひとり取り残さない」というのは、「始めから100%を目指すのだ」という意味なのだと言っていました。例えば、「2030年までに何かを90%にする」という目標があったとして、単純に想定すると、全体の10%を切り捨てたほうが早く90%を達成できるかもしれません。でも、そういう何かを切り捨てる考え方を排除するために「誰ひとり取り残さない」という考え方があるのだということを知って、なるほどなと思いました。

グループ全体を見ると、2030年に幸せな社会にするために、どんな社会にしていくか、というのが最初の問いでした。それに、全ての人々が納得するというのが重要なんだと思います。すてきな社会をつくるときにどうあろうか、どうしようかということは、当事者の問題であるというよりは、問題1つ1つが取り残されないように幸せな社会をつくらなくちゃならない。全ての人々の問題が解決するような社会にならなきゃいけないということを話し合うことに意味があるのだと思います。

だから、全体として、個別のことに取り組んでいる人を応援しなきゃいけないし、その人たちが苦勞していることも、我々は応援するというようなことをしていきたいです。

そのためには、当事者じゃなくても発言ができることが必要だと思っています。1つのグループで問題が起こったときに、「当事者で解決しろ」「あ

なたたちはステークホルダーではない」というような言い方をすることがあるのだけれども、我々もそのほかの人もステークホルダーだと考えます。

だから、「声を上げないということも不作為の罪である」という言葉が僕の中ではやりなのですけれども、当事者ではないから何も言わないのは問題であるということが全体ミーティングで理解できるのかなと思えました。全員が当事者なんだということを宣言するのが「誰ひとり取り残さない」の解釈の一つだろうと思っています。

小泉：このプロジェクトは、「誰一人取り残さない」というスローガンを意識した取組でもあるのですが、限られたグループなので、結構取り残している取組でもあります。ですが、ひとまずは「私とは全然違うのだな」ということを受け止め合える場であればいいのかなと思えました。

当事者性というのは大事だと思っていて、ほかの人はそう簡単には同じ土俵には立てないと思います。私はアイヌのことに関わっていますが、私自身はアイヌ民族ではありません。当事者とのギャップは簡単には埋められないし、埋めたかのように振る舞うこともむしろ問題だったりします。当事者性というのは、「部分」ではなく「全て」だと思うんですね。だから、当事者グループは、それ以外の全てとある意味対峙しているのだと思います。

でも、立場によって違うということを理解するのが、まずは必要だと思います。おじさんたちは若い人が言うことをそう簡単には理解しないかもしれませんが、そこを受け止め合うということが必要です。そういう意味では、全体としてまとまらなくてもいいのかなという気もしましたけれども、実際思っていたよりも、グループ間で共感する部分は多かったのかなと感じています。

小路楓（ユースグループ 以下、小路）：まず、全体ミーティングは、それぞれが成果や結論を発表して、「ほかのグループはこんなことを考えていたんだ」ということを知ってもらうという大きな目的があったのですが、よくも悪くも、それ以外に何が起こるのかということはいまあまりイメージが

ついていませんでした。

実際に開催してみて、ユースグループの発表に対して反響があったことに、長谷川さんと2人でびっくりしました。

長谷川：ユースの発表に反響があったことについては、個人的にはまだいろんな考えに揺れています。いろんな意見をいただいたな、と思えました。全体ミーティングから1ヶ月以上経った今、あれだけ反響があった原因の1つとして、そもそもユースがなめられていたのではないかということも考えたりしました。「全然何を考えているか分からなかったユース」がこれだけ考えていたということを知ってもらえた、というとらえ方もできていると思っています。「私たちが若いということだけを見ないでほしい」という発表の後に「若いのにすごいね」という声があったというのもあり…。ただ、そういう声が出たから私たちユースが怒っているとか、悲しいとかではなく、なんというか…ユースが声を上げること自体が、いろんな構造の中にあった、ということ思い出しました。

なので、全体で発表するのは1回きりではなく、これからも続けたいです。ユースの声を届け、それによって社会がもっと持続可能になる方法を探していきたいです。

以前、障害者と呼ばれる人たちは「何もできない人」として見られると山崎さんが言っていましたが、何もできなくはないというか、全然できる。全然できるのに、不当な扱いをされているから声を上げているわけです。褒められたことをまっすぐ受け止める私たちであっていいのか、ということに対して、いろんな考えに揺れています。

山中：私はユースがすごいとは思ってなくて、今回の設計がいいのだと思っています。設計がよかったのは、長谷川さんを中心とするメンバーがよかったということだと思っています。「ユースだから」ではないと思いますよ。

普通は、そのようにラベルを貼ってしまうのですよね。本当はこんな個性があり、たまたまいるメンバーなのに、それに対して長谷川さんがユ-

ス代表のように思われてしまうみたいな怖さは、本来感じる必要はないと思います。

長谷川：ここにいる方が、私たちの取組を見てくれているということはすごく感じます。

小泉：この話は、このプロジェクトの抱える課題でもあると思います。あえて属性で分かれるということは、逆に言うと、その属性として見られるということがつきまといまいます。それを上回る成果を得られるのかということは問われる部分です。

このプロジェクトはSDGsを直接打ち出したわけではありませんでしたが、SDGsで示されている諸課題をどう解決するのかということを各グループの視点から捉え返すことが、今後の話題になりうることでもあるかなと思いました。

さて、ここまで話をしてくれて、これは始まりだと感じていますが、スタート地点に立った私たちは、今後どうしていけばいいでしょうか。改めて、このプロジェクトが持つ意味は何だと思いますか？

長谷川：社会的属性が同じ人たちと話し、その属性の声として意見を束ねて、半ば代表とも思われる形で発表することに対していろんな見方をされるとは思いますが、あえてこれからもやっていこうと思います。属性として見られる限り、集まる価値があると思っています。

この取組は、立場の違う人から何を言われようと、そのリアクションをそれぞれのグループに持ち帰ることができるのが強みだと思っています。いろんなセクターから安全にリアクションをもらえる関係性はいいなと思いました。例え「この人に伝わらなかった」と思ったとしても、その人個人に対する嫌悪感とかは全くなく、そう受け取られる現状に対して「じゃあこうしてみよう」というのを考えやすい。こういう取組を通して権利を守っていくことにつながるのはいいなと思っています。

山中：やはり部分を見ながら全体を考えるとというのが重要だと思います。ステークホルダーを全部集めて考えましょうというのと、1つの結論をつくりたがる人が多いです。1つの結論を決めるとなると、個性が消えるのですよね。

でも、プロセスが重要で、最終的にはまとまらなくてもいい。お互いのことを理解していればいいという格好で、どう違うのかを言語化し、ほかの人に説明できるのがゴールなのです。北海道メジャーグループとしての「1つの解はこうです」ということが共通のゴールではなく、今回行われたように、いろんなものがあり、それぞれが考えて向かおうとし、どこまで進んだのかということも1つの特徴だと思います。

私の気持ちとしては、やってみて面白かったです。社会全体として見たときに、セクターとして個性を持った集団で、同じことについて考えて、それぞれのセクターが違う答えを出す。「なるほど、こういう答えが出るんだ」と思いました。

それぞれの意見表明をしたら「ほかの立場の人からはこういうふうに取りえられるんだ」というのがわかる。それは今まで、個人的なキャラクターで話しているのか、それとも全体の意見なのか、というところが曖昧になっていました。ある程度のコミュニティと、それを取り巻くサブコミュニティがいくつかあった中で、こういうレスポンスがあるのだということが分かる、多様性が確保されるやり方なんだなあと思いました。

だから、もう少しグループを分けてもいいかもしれませんね。今後だったら少子高齢化とか、教育とか、世代間についてなど、共通のテーマをそれぞれのコミュニティが考えて持ち寄るのが、非常に理解を進めるかなと思います。今回は国連75周年の問いだったけれども、1つのテーマを設けて対話することも重要なことと感じました。

久世：私も続けていきたいというのが率直な感想です。社会的属性で分かれることで、改めて自分は女性であり、ユースでもあるというように複数のポジションがあることに気づけました。今後続けていくにあたって、

グループごとの壁がもっと柔軟になっていくと面白いなと思います。その時々で人が動いていくことで、グループの個性が際立ち、全体としての話が深まっていくのかなと思いました。

あとは、やはりこのプロジェクトに関わっていない外の人たちにきちんと届けて、その反応を捕まえていくのも大事にしたいと思います。「今回やりました」という報告で終わらずに、「これどうだった？」と聞いてみたいというのが私の希望です。

小路：今回は、最初は政策提言をしたいと考えていましたが、そのためにはもう少しオリティの高いもののほうがいいから、今年度は見送ろうという話でした。数年以内には、北海道のSDGs推進ビジョンの見直しなどが多分あると思うのですよね。ゆくゆくは、そのあたりに向けた政策提言をメジャーグループとしてできたらいいなと思います。

あとは、今回のプロジェクトはアジェンダ21を基にグルーピングしましたが、北海道ローカルの現状に合わせたグルーピングを北海道版メジャーグループでやりたいと思っています。

小泉：もともと、このプロジェクトの1つのきっかけは、北海道のSDGs推進ビジョンが、「多様な主体が共有する指針」として打ち出されていたことでした。そうした経緯もあるので、政策提言をして、多様な主体が課題を共有するというのを常識にしていきたいという思いはあります。例えば、障害を持った人たちは、障害者の政策をつくるときには呼ばれるかもしれませんが、ほかの場面では呼ばれない。あるいは、女性が男女共同参画の会議には呼ばれるけれども、ほかの場には呼ばれないということは、日本では当たり前になっちゃっています。国民や道民というくくりで、一見誰ひとり取り残していないように見えるが実は漏れていることも、こういうメジャーグループのような形だと打ち出せるのかな、とは思っていました。

また、グルーピングについて、正直初めに集まったときに、カテゴライズが結構難しいなと思いました。最近、このプロジェクトを紹介する機会

が何度かありましたが、話を聞いた在日の研究者は、自分だったら在日コリアンのグループがあったとしても、そこにはあまり入りたくないな、と言っていました。同じ属性だからといって、必ずしもだれもが話しやすいとは限らない。なかなか難しいづくりではありますが…でも、やりたい人がやるというところでもいいのかなと思っています。

長谷川：今回よかったなと思ったのが、「ユースってそもそもなんですか」とか聞かれなかったことです。グループのメンバーは「私たちが必要だと思ったから話したんです」という感じでしたし、ほかのセクターにもそのような空気を感じていました。当事者にとって必要であるから話すというのがベースにあるというのが、私は心地よかったのかなと思っています。あくまで必要性に応じてグループが組まれると、カテゴライズはよい戦略になるのかなと思っていました。

小泉：私も同じように考えています。全体でこれらのグループをつくり出す、というのではなく、主体的にグループを組んでいくというのがいいかなと思っています。

山中：「こういうところが足りないね」と言って声かけをするのは大事ななと思っています。そのときに、誰でも入れるということが、誰ひとり取り残さないということだと思うのです。あまりキツキツに網羅性を気にするのではなく、ゆるくいつでも募集していますよ、というような格好でいいのではないかと思います。

個人的には、地域コミュニティグループが次回はもう少し多くあったほうがいいかなと思いました。この間、高校生と話したときに、札幌の高校生が「少子化なんてピンとこない」と言っていたけれども、廃校になるような高校生にとっては「少子化こそが全て」みたいなことがあって、お互いに理解はしたのですが、こんなに切実な人と切実じゃない人が話すのは初めてだね、と言っていたんですよ。

だから、そういう意味では、このメジャーグループももっと様々な地域

が加わると、この場のディスカッションがより豊かになるかなと思っています。

小泉：札幌でやりがちなこととして、安易に北海道を名乗っちゃうのですが、実は札幌近郊の人しかいないということもよく起こりますね。農民グループなどは違いましたが、全体としては今回の参加者は札幌近郊にとどまっていたと思います。

プロジェクトを通して、ここは課題だと思う部分はどこですか？

長谷川：このプロジェクトは、完全に任意の活動です。でも、未来を考えるためには本当に意味のあるプロジェクトだと思うので、参画する人や手を挙げてくれる人に、何か対価があればいいなと思ったりします。課題感でいうと、なんていうか…お金というか、うまく説明できないんですけど、対価としてお金が回るといいかなと思います。

小泉：具体的には、グループミーティングをコーディネートするというところに一定の謝金を出すとか、そういうイメージでしょうか？

長谷川：正直、具体的な解は出ていません。でも、今回の私の関わり方だと、ユースグループミーティングは北海道地方 ESD 活動支援センターが主催ですが、進行として関わったことで、私に金銭的な対価が支払われました。それはすごく、私にとっては希望でした。これが仕事になるということが、すごく大きかった、ボランティアじゃなかったということですよ。私はこのプロジェクトに関わることを、「ボランティアでしょ」という言葉で済まされたくないという気持ちがあります。

実際にじゃあどうするのという話ですけれども、主催の組織の方は、お仕事の中で関わるなど、様々な立場で関わるとしています。一方で、組織に所属せずに関わっている私みたいな人もいます。高校生や大学生、若い人は「価値があるから対価をください」とも言いづらいし、実績があるのに

うまく伝えられないから、取組に対して対価が支払われないケースも多い。今回は、小路さんが、私の思いや今までやってきたことをもとに駆け回ってくれたんですけども、ほかのユースがしっかり動きますとなったときに、継続的な形で金銭的な対価がつけられないのだろうか、という思いがあります。

山中：この話は非常に面白い話だと思います。世代や社会的属性で答えは変わるはずですが、学生は何をやっても学べだとか、若いうちの苦勞は買ってでもしろみたいな風潮がありますが、その一方で、大学に進めないなどの貧困の問題もものすごく大きい。それが理解されていないだとかいろんな問題があるので、それも話し合いの中に入れるというのはテーマですよ。 「ボランティアって何ですか」という問いを投げても、属性ごとに違う答えが返ってくるんじゃないかと思っています。

私のもとに来た留学生は、最初に貧困を訴えます。そうすると、「その時間をほかに使ったならば」ということを想像することが必要です。2時間あったら2時間分のバイト料をもらえるはずなのにこの研究をやるのだ、ということです。インターンシップは、2分の1の対価を払うという格好で僕は納得しています。社会に対して応えるのと、自らの学びと。その両方が成立するという事ならば、お金が払われるのではないかと思います。それが、自分だけの学びで終わっていると「それはいらないよね」と言われてしまう。

そういう意味では、このプロジェクトにスポンサーをつけるために、「こんないい活動に対して企業がスポンサーになると企業イメージが上がりますよね」みたいな仕組みをつくる必要があるんじゃないかな。

小路：長谷川さんに対価を支払うことができた理由は、私が走り回ったからというよりも、シンプルに、もともと長谷川さんがそれだけのものを持っていたからです。私が走り回ったのは、長谷川さんのどの部分に対して対価を出すかを、私が新卒1年目ゆえ、うまく上司に説明できていなかったから結果的に走り回っただけです（笑）。当センターの中だけで、ただユ-

スグループミーティングを開催する分には可能だけれども、長谷川さんに頼んだほうが、確実によりよいものを作ることができるので依頼をしたというそれだけの話です。

山崎：実は、DPI北海道ブロック会議のメンバーも、ほとんどが札幌を中心に在住している人たちです。札幌市外に住んでいる障害当事者もいますが、地域間格差が著しくて、障害者が札幌市以外の地域でほかの人と同じように生活するというのが、地方に行けばいくほど、現実的には難しい。

まず、バリアフリーの住宅がないので住む所がないことから始まり、車椅子でも使える交通機関がなかったり、介助という福祉制度も整っていない。

また、障害に限った話ではなく、何かにカテゴライズされた人たちだから見えること、感じること、発信できることがあるのに、そこに価値を見出されず、お金に結びついていかない。DPI北海道ブロック会議もそうですけれど、会費や寄付だけで成り立っているのも、正直厳しい部分があります。何か取組をしようとするとお金がかかってくる、でも捻出できるお金があまりないから大きなことはなかなかできない。カテゴライズされた人にだけが見えることに対する価値があるから、と言って寄付を募ってもなかなか集まらない。結局のところ、「そういうことをやって、この社会の何が変わるの？」というところにまた戻ってしまう。こうしたループをどうにかできないものかと思います。

小泉：ありがとうございます。話す中でいろいろな課題が出てきました。お金の話ですが、自由学校「遊」も必ずしも余裕があるわけではありません。いろいろ工夫してはいますけれども、行政や企業からお金をもらうことで制約も受けたくないという思いもあり、難しいところだなと思います。

清水：企業の人間として、自分たちは社会を変えられるチャンスがたくさん持っていると思っています。プロジェクトを通して社会を変えるヒントや、それに関われる機会をもらっています。企業は企業説明会をはじめ、

求人をするだけでもすごくお金をかけていますが、僕はこのような場にお金をかけて、企業と、働きたいという人たちとの接点を作っていくことのほうが、健全な社会の姿になると思っています。ユース、女性、障害者もそうですが、こういった中で、働きやすい環境を知って、チャンスを見つけていくわけです。

だから、こういう活動への支援をバンバン企業に投げかけてほしい。「こういうプロジェクトに関わっているから」という理由で、うちの会社が選ばれるということも出てきています。自分たち企業もどんどん発信していかなければな、と思っています。

小泉：長時間になりましたが、皆さんお疲れさまでした。それぞれが主体的にミーティングを呼びかけ、グループを立ち上げてくれて、ちゃんと形になったことを嬉しく思っています。今日話された課題も踏まえながら、次のステップへと進めればと思います。ありがとうございました。

編集：長谷川友子（ユースグループミーティング進行担当）

◆プロジェクト実施主体

チーム「北海道メジャーグループ・プロジェクト 2020」

【グループと担当団体】

女性担当： 札幌市男女共同参画センター
ユース担当： 北海道地方ESD活動支援センター
農民担当： メノビレッジ長沼
障害者担当： DPI北海道ブロック会議
地域コミュニティ担当： NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト/
SDGs目標達成のために協力する江別
NGO・NPO 担当： 北海道 NGO ネットワーク協議会/
北海道 NPO サポートセンター
研究者担当： 2050年委員会 北海道研究者有志の会
企業担当： 中小企業家同友会産学官連携研究会「HoPE」

=====

北海道メジャーグループ・プロジェクト 2020 報告書

聴きあおう未来を照らすあなたの言葉わたしの言葉

発行日 2021年9月1日

発行 NPO法人さっぽろ自由学校「遊」

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目愛生館ビル5F

TEL.011-252-6752 FAX.011-252-6751

E-mail syu@sapporoyu.org URL <http://sapporoyu.org/>

紙面デザイン・イラスト 小原みさき（任意団体 snug）

助成 独立行政法人環境再生保全機構 地球環境基金

=====

